

川俣へ！



大宮で東北新幹線に乗ると、
1時間と少しで着いてしまった。
キオスクで買ったおにぎりを食べて、
韓国でヒットしたという
青春小説を読んでいるうちに、
うたた寝する暇もなく福島だ。
なんだか拍子抜けしてしまうくらい
近さなのである。

「東北」とはいえ、感覚としては
「関東のとなりの県」か。

のんびり揺られるのもたまには悪くない。



「阿武隈川」。
雄大な自然が出迎えてくれる。



にぎやかな市中を抜けると
バスは阿武隈川を渡ってゆく。
東北地方では2番目に大きな川である。
福島出身の高村光太郎は、
かの「智恵子抄」の中で
『あの光るのが阿武隈川』と
詠んだというが、
確かに川面が陽光に照らされて
キラキラと光っている。
初春のおだやかな気候と相まって、
なかなかの風情である。

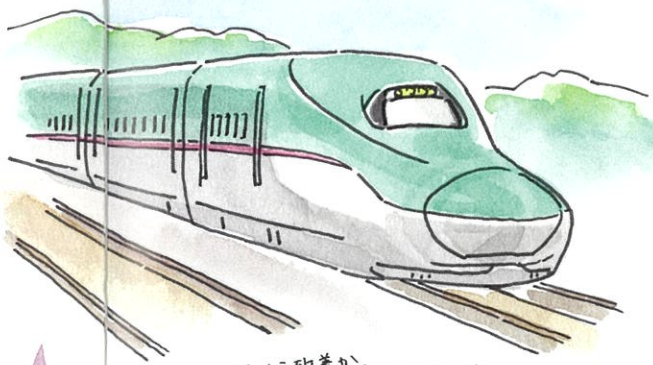
5〜6人の客を乗せたバスは
山あいなのんびりとした風景を抜けて、
ひたすらとんとん進んでゆく。
途中で「UFOの里」なる施設を発見。
静かに通過したバス停の名前も
「UFO（ゆーほー）の里」。
思わずクスッとしてしまった。

立ち寄るのは
また次の機会に…。



福島駅では
古関の像が
お出迎え。

さて、今回の目的地は「川俣町」である。
朝ドラ「エール」の主人公のモデルで、昭和を代表する作曲家、
古関裕而が若き青春の日々を過ごした場所だ。
福島駅から川俣町までは、かつて鉄道が敷かれていたが、
1972年（昭和47年）に廃線となってしまい、
いまではバスや車などに頼らざるを得ない。
JR福島駅前でオルガンを楽しそうに弾く
古関の像を横目に、川俣行きのバスに乗り込んだ。



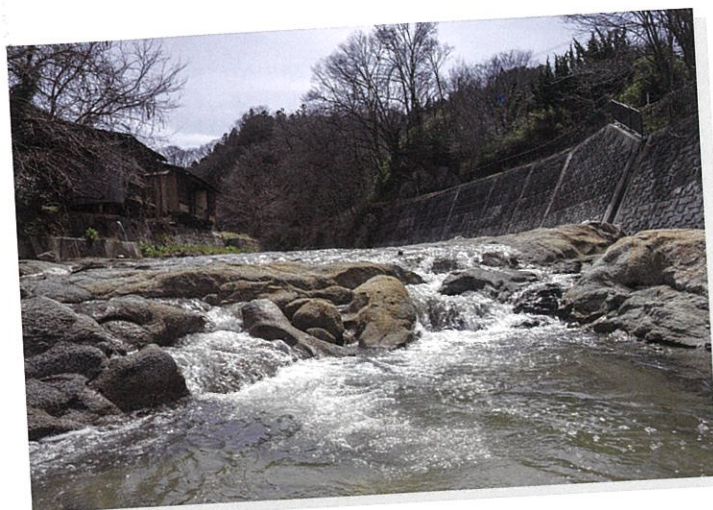
なんだ、もう到着か。
鉄道ファンには少しもの足りないか。



周りを見渡すと、
同じくらい比較的背の低い山々が
川俣町を静かに見下ろしている。
標高300〜500メートルくらいの山が多く、
春にはコブシの花が、
初夏にはユウスゲなども咲くという。
手軽に登山を楽しめそう。



機織りは川俣町の誇り。



古関が愛した景色が
今も楽しめる。



山と、花と、清流と。
どこか懐かしい
みんなのふるさと。

ユウスゲ

この町はかつて
絹織物産業の中心地として栄え、
200を超える
機織り工場があったという。
当時、あふれるほどの
財を成した人々が建てたのであろう、
立派な白壁の蔵が
町のいたるところに見られる。
古民家も点在しており、
レトロな雰囲気に満ちた
町であることがわかる。

川俣町へ絹織物を伝えた
「小手姫様」と特産「川俣シャモ」の
PR隊長「シャモくん」。
館ノ山の登山口にて。



「絹の町」として栄えた川俣。
町中に「蔵」が立ち並ぶ。

福島駅からおおよそ40分、
川俣町内で、あてもなく下車してみると、
眼下には小さな川が流れ、
山が目の前に広がっている。「館ノ山」だ。
かつては城が築かれた山であり、
古関はこの山に登り、
後に妻となる金子に
思いを伝える手紙を書き、
曲も作ったという。

コブシ

